

広島・草戸千軒町遺跡

- 1 所在地 広島県福山市草戸町
- 2 調査期間 第三五・三六次調査 一九八五年(昭60)十一月～一九八七年三月
- 3 発掘機関 広島県草戸千軒町遺跡調査研究所
- 4 調査担当者 代表 松下正司
- 5 遺跡の種類 集落跡
- 6 遺跡の年代 平安時代～江戸時代(中心は主に鎌倉・室町時代)
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要
第三五次調査区は、遺跡包蔵中洲の中央部西端に位置し、東西約三五m、南北四〇mの約一四〇〇m²である。



第35・36次調査区位置図

この調査区北半部では、中洲北部に広がる室町時代後半の町囲・町割のための大規模な柵囲が完結し(SA二〇九〇・三三三五)、全体では、概ね東西九五m・南北一四五mの規模になる。またこの柵囲の外周を、鎌倉時代後半から室町時代後半にわたる溝群が、複雑に切合って巡っており(SD二〇七〇・二〇七二・三三三〇・三三四〇・三三四一・三三四二)、長期間、一定方向で町割として機能していたものと考えられる。また南半部では、室町時代後半の小規模な柵(SA三三三〇・三三三一・三三三二・三三三三)や、各時期の多数の柱穴・礎石群、六基の井戸(SE三三二五・三三七五・三三九〇・三三二五・三三三五・三三三〇)、約二六〇〇枚の古銭を収納した埋甕遺構(SX三三三〇)などを検出した。木簡はSD三三四〇から一点、SE三二七五から三点出土している。

SD三三四〇は室町時代前半頃の東西溝で、南北方向のSD二〇七〇と結ばれている。東側の第三四四次調査区でSG三〇六〇池に流れ込んでいたことが明らかになっており、全長は六〇mになる。

SE三二七五は鎌倉時代後半の木組の方形井戸で、径二・三mの掘形に、一辺一・一m、深さ一・四mの井戸側を持ち、井筒として曲物が据えられていた。内部から、多量の土師質土器、杓子状木製品・折敷・漆器・下駄などの木製品、骨角製の「さいころ」などが出土している。

第三六次調査区は、中洲の中央部に位置し、東西五〇m、南北五

〇mの二五〇〇m²である。この調査区には、一九六一(昭36)・六二年に、第一・二次調査のトレンチが入れられており、現在に至る大規模調査の端緒となった地区で、今回、往時に言わば点として確認された遺構を、面として明らかにすることが出来た。

調査区東側には、室町時代全期にわたって長期間機能した濠のような大規模な池状遺構(SG三〇六〇)がある。西側には、鎌倉時代後半～室町時代前半の町造りの骨格をなす柵(柵一～三)、溝(溝一～三)がある。そして、柱穴・礎石・土壇などは、調査区北西部を中心にみられたのみで、全域には広がっていない。木簡はSG三〇六〇、SK三四二五(土壇一)・三四五二(土壇一)・三四五六(土壇三)からそれぞれ四点・二点・七点・一点の計一四点が出土している。SG三〇六〇は北側の第三三・三四次調査区から続くもので、調査区東側を縦貫し、更に南側の調査区へ延びている。東西一五m、南北七〇m以上になる大規模なもので、周辺の状況から、室町時代全期にわたって集落の東限を画す濠のような施設と考えられる。

SK三四二五はSG三〇六〇が埋まった段階で掘られたもので、東西二・六m、南北二・〇m、深さ〇・五mを測る。杭の片面を削って墨書した柱状の塔婆(8)が打込まれ、傍らから五輪塔火輪が出土している。

SK三四五二は東西二・六m、南北二・〇m、深さ〇・六m、SK三四五六は東西一・五m、南北四・〇m、深さ〇・八mを測る。

共に数千本に及ぶ箸状木製品のほか、折敷・曲物・下駄・草履状木製品・漆器などの木製品を中心とした廃棄用の土壇と考えられる。共に室町時代前半のものである。

8 木簡の釈文・内容

SD三二四〇

(1) 「二百卅□□ (102)×27×5 109

SE三二七五

(2) 「□□ (74)×(25)×2 180

(3) 「 \vee 二と四 \square う」^{〔せカ〕} 141×35×5 111

(4) 「 \vee 四と六 \square う」^{〔せカ〕} 139×35×5 111

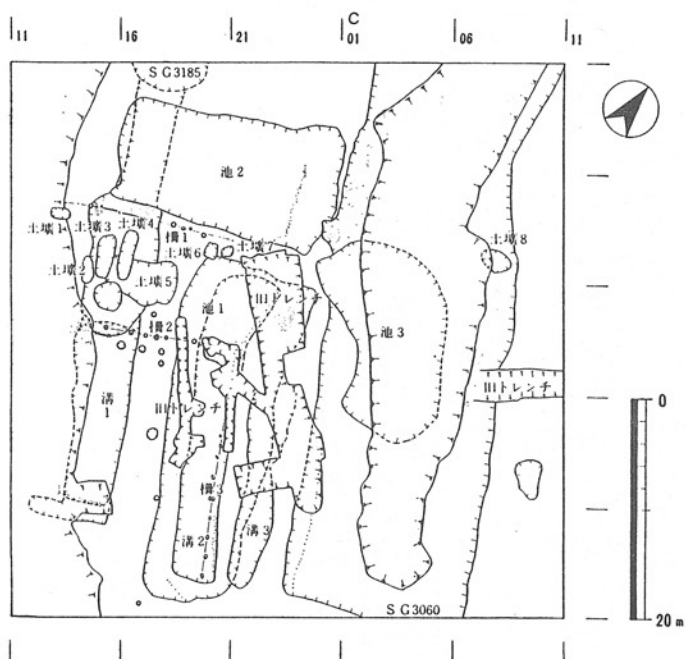
SG三〇六〇

(5) 「□□」 138×37×20 143



(6) 「 \square 南無六道能化地藏大菩薩 (947)×53×9 170

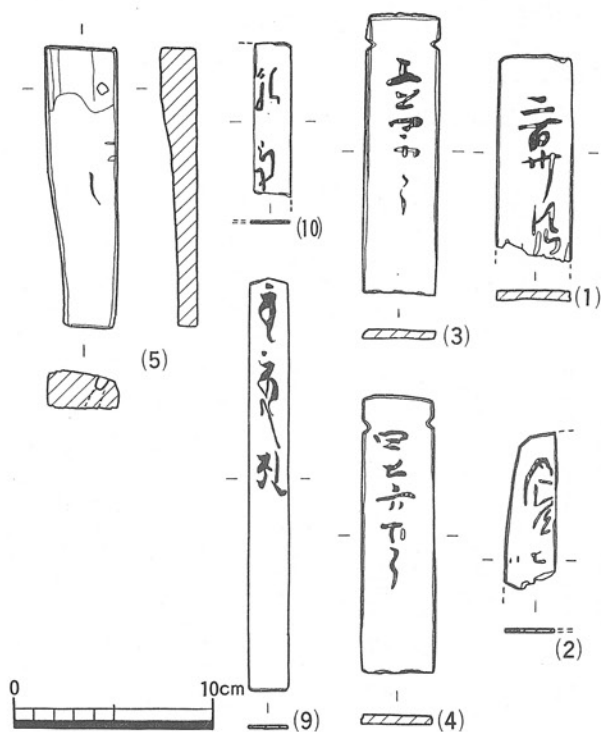
(7) 「 \square 」^{〔可読カ〕} =


「□□」 (1301)×(52)×(22) 195

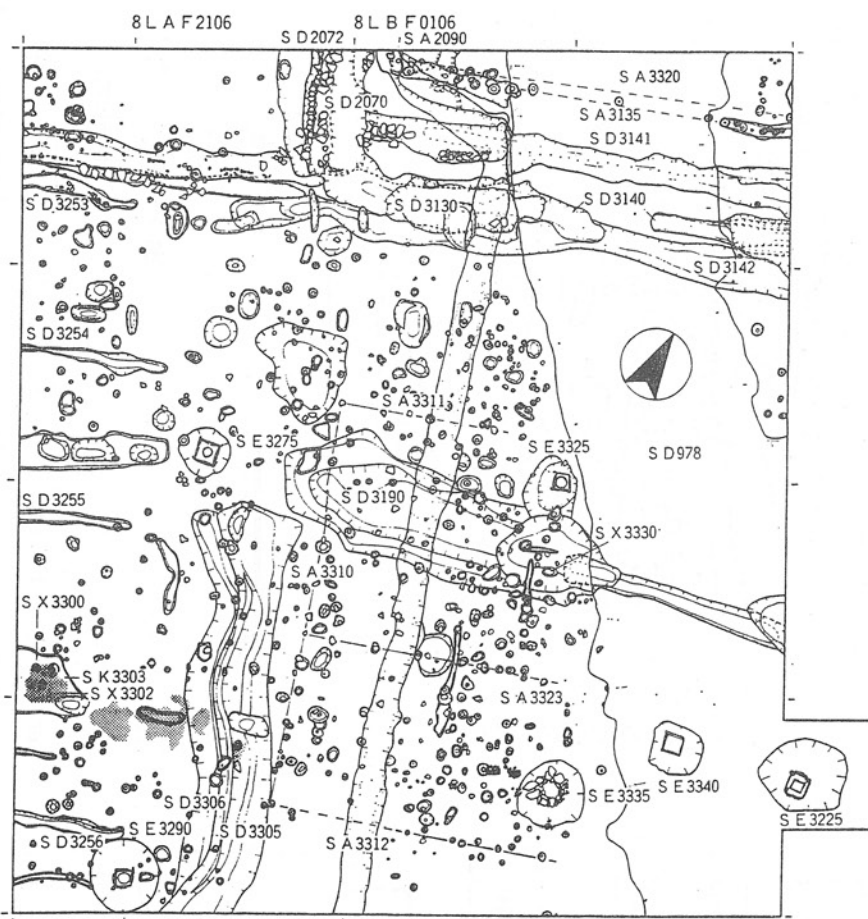


第36次調査区遺構図

- (9) 「**おき月**」
SK三四五二
206×20×2 172
- (8) 敬  [白カ]
(449+614)×(70)×(50) 195



- (2)・(10)は、墨書された折敷の破片である。(3)・(4)は、それぞれある物品の二斗四升・四斗六升の荷札と考えられる。(9)は笹塔婆で、SK三四五二から同じ文言のものが六点出土しており、三点は重なっていた。(5)は表面を何度も削って使用したもので、墨痕は削り残
- (10) 
SK三四五六
(77)×(19)×2 180



第35次調査区遺構図

されたものと考えられる。(8)は上部と下部とは直接
接合しなかったが、調査時の状況から、同一のもの
と考えられる。(6)は頭部を五輪形に整えた板塔婆で、
文字が切れる所に木釘が残っている。(7)は細い丸木
の片面を削って墨書したもので、柱状の塔婆である。

9 関係文献

志田原重人「中世の民衆と地蔵信仰」(『草戸千軒』
No.161 一九八六年)

福島政文・田辺英男・大上裕士・篠原正治「草戸
千軒町遺跡第35次調査概要」(同 No.163 一九八七年)

下津間康夫・福島政文「草戸千軒町遺跡第36・37
次調査略報」(同 No.165 一九八七年)

広島県草戸千軒町遺跡調査研究所『草戸千軒町遺
跡―第三・三六次発掘調査概要―』(広島県草戸千
軒町遺跡調査研究所年報一九八六、一九八八年刊行予定)

(下津間康夫)